京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十六卷　第四號

大正十二年四月一日發行

論叢

納稅義務者としての內藏……法學博士　神戸正雄

價値の類型と個性……法學士　恒藤恭

サン・シモン派の社會改造哲學及び連帶思想……文學博士　米田庄太郎

基督教文明の發展概論……法學博士　財部靜治

時論

天然資源の國際的開放の原則……法學博士　戸田海市

產業組合中央金庫に就て……法學博士　河田嗣郎

說苑

婚姻年齡の統計的研究……經濟學士　岡崎文規

雜錄

失業保險制度の推移……法學士　一戸二郎

生產者及び消費者としての露西亞……經濟學士　藤野靖

世界的貨幣問題とカッセル教授の學說……經濟學士　小川福太郎

獨逸高等官の生計費……經濟學士　岡崎文規

マックス・ウェーバーの論文集……法學士　山口正太郎

價値の類型と個性（一）

恒藤恭

一

實在的對象の世界が、殘る隈もなく合理化され得るとは、素より考へ難いであらうけれど、われわれの理論的理性が實在的對象の世界を支配し能ふ限りにおいてのみ、經驗科學の領域が成立するといふことも、否定すべからざる事柄である。それ故、實在的對象の世界が理性のはたらきによつて經驗の世界にまで組成される論理的構造を、確實に認識することは、經驗科學の存立の根據を問題とする者にとりて、最初の且つ最後の課題たらざるを得ないわけである。

かやうな意圖を以て、理論的理性の働きを批判することは、必竟理論的理性その者の働きに俟つ外はないが、この理性一般に課せられた自己批判の任務は、歷史的には、カントの批判的意識によつて、初めて明確なる自覺を以て行はれた。唯カントの批判は、理性が經驗の世界を構成する機能の全般に向つて成し遂げられたわけではなく、主として、この機能が普遍化的概念構成原理に則つて活動する方面に向けられたのであつた。そして同じ機能の個性化的概念構成原理に從

ふ方面における批判の事業が、ウインデルバンド、リッカートなどの人々によつて着手され、進捗せしめられたことも、知れわたつた事實である。

かくて、經驗の對象たる實在の世界については、われわれはその一般的論理的構造を瞭然と見渡し得るやうな立場にまで、導かれ來てゐるのであるが、ロッツェ以來、多くの哲學者たちが好んで實在の世界に對立せしめる慣ひである所の價値の世界については、事實は必ずしも同一でないやうに思はれる。

價値的對象の世界は、おそらくは、實在的對象の世界に比して、一層頑強なる抵抗を理性の論理的支配に向つて提供するものと言ふべきであらう。けれども、われわれが價値の世界についても思索をめぐらすことを思ひ止まらない限り、その世界の論理的把捉が如何にして且つ如何なる程度まで可能であるかといふことを、吟味せずには居られない筈である。しかるに、價値の世界の論理的構造の認識は、從來主として、普遍化的概念構成の方面からのみ行はれたのであつて、價値の個性の論理的檢討は、甚しく等閑に付せられた觀がある。勿論、フイヒテやヘーゲルやによつて企てられた所の、偉大なる個性的價値內容の思想的把握は、永久に後人の心を躍らす力を有するものであり、殊にヘーゲルにおいては、斯かる企てが、價値の個性に關する、深く豐かなる論理的思索に立脚するものであることは、否むべくもない。唯ヘーゲルなどにおいては、强烈

なる形而上學的興味が、つねに純粋なる論理的興味を甚しく壓迫して居り、その點において、多くの批判的修正を要すべきものがあるやうに考へられる。私の乏しい知識の及ぶ限りでは、實在と價値とを截然と別つ批判的見地に立ちつゝ、價値の個性の論理的構造を、初めて十分なる自覺を以て問題とした者は、ラスクである。しかしながら戰爭のために天壽を全くしなかつたラスクは、この問題を十分に展開して、その諸相に亘り考察しつくしたことは、決して言ひ得られないと思ふ。

この稿において、私が試みたいと思ふ考察は、元來ラスクの所論によつて暗示を受けたのであり、根本において彼の思想に負ふ所が甚だ多いが、價値の個性の理解について、ラスクとは多少異なつた方向へと、問題を展開して見たいといふのが、私の希望である。或は、ラスクとは相違した途をたどつて行くほど、私の考察は、あやまちの深みに陷つて行くといふのであるかも知れない。けれども、現在では、私自身は、その途をたどつて行くことが、決して無用でないと信じてゐる。そして、價値の個性の問題の考察は、價値の世界その者の洞察の上に大切なばかりでなく、實在の世界の構造をより明確に認識する上にも役立つものであり、否そのために缺く可からざる條件を成すものであるとも考へるのである。

二

價値の妥當の普遍性の問題と、價値の內容の普遍性の問題とは、哲學の歷史において古くから互ひに密接に相關聯せしめられて取扱はれ、且つやゝもすれば、共に同一の意義を有する問題たるかの如くに取扱はれたやうに思はれる。たとへば、プラトーンのイデアの說は――殊にその初期の形態において――さうした事例の一つであると思ふ。

尤も更に遡つて考へると、プラトーンは、かやうな思索の傾向を、その師ソクラテスから受け繼いだのであるとも、言ひ得られるであらう。普通に知られてゐるやうに、ソクラテスは、德と知との間に、最も深き、最も密接なる關係の存在することを、確く信じた。彼は、ソフイストと同じやうに、道德生活において、個人をして傳統的權威から解放されしめることに力を竭したが、ソフイストが、個人の自然的性能又は感情の考量によつて、實際的生活の規準を索めやうとしたのとは違つて、ソクラテスは、眞正なる智識の光明の照らす所にのみ、眞正の德は成立すると說いた。然るに、ソクラテスの見解によれば、認識は普遍的概念の把持を意味するのであるから、人が道德的に行爲し得るためには、その行爲に關係ある事物について、普遍的知識をもつことを要するわけであり、殊に何よりも先づ行爲の主體たる己れ自らについて普遍的知識を獲得しなければならぬ筈である。[1]

他の何物にも俟つ所なく、純粹に己れみづからの力によつて存立する道德の規範の權威を確立

1) cf. Gomperz, Griechische Denker, 2. B. 1912, S. 53ff.

することが、ソクラテスの哲學的思惟の根本的動機であつた。斯かる道德の規範に特有なる力はその絕對的妥當性に他ならぬ。あらゆる臆見や俗說やの紛雜の上に超越して、その正邪を明かにする標準たるべき道德の法則が、斯かる使命を果し得るためは、何よりも先づあらゆる人に對して承認を要求するの權威を、卽ち普遍妥當性を具有しなければならぬ。そして、斯かる普遍妥當的法則を把持することこそは、認識の唯一の任務であると共に、斯かる法則の認識こそは、道德の根本義である。——德と知とは合一するといふソクラテスの根本見地からすれば、德を認識することは、德の最高なるものであるが、德の認識は、德の認識の可能性を前提するものと言はねばならぬ。他の言を以て言ふと、德は敎へられ得るものでなければならぬわけであるが、眞に敎へられ得るものは、概念されたもの、概念によつて把捉されたものゝ外にはない。——かやうにソクラテスによれば、道德の本質は、自律性と可認識性とに存するのであるが、この二つの性質は、概念の論理的機能に他ならぬのであつて、概念こそは道德の價値を如實に表現するものである。しかも概念による理解、すなはち認識は、道德的事物についてのみ成立するのであつて、概念の論理的機能が、道德の本質的特徵と合致するのも、深き因由に基くのである。[2)]

ソクラテスは、かくの如く、道德の價値と眞理の價値とを、不可分離的に關聯せしめてゐるが元來彼の認識論的見解は、ソフイストの相對主義的認識論に對する峻しき反對において成立した

2) cf. Hönigswald, Die Philosophie des Altertums, 1917, SS. 132 ff.

のであるから、あらゆる人間に對して妥當するものとしての認識の意義を、最も力强く高調するものである。そして或る認識が、眞にすべての人間に妥當する認識として成立し得る所以は、其れが、すべての個別的事物の知覺のうちに含有されてゐる所の共通的なるもの、普遍的なるものを、的確に把握し提示するからであるとされる。[3] すなはちソクラテスによれば、理論的眞理が普遍妥當的たるのは、それによつて定立される論理的內容の普遍性に基くのである。換言すれば、認識の價値は、それが概念に依つて、普遍的知識內容を確立するからであり、更に、事物の正しき認識を必然的前提條件とする道德的行爲の普遍妥當性も亦理論的內容の普遍性と、最も緊密に結合するものと言はねばならぬ。

道德的規範と同樣に、自然法則も亦、認識及び概念の必然的條件を滿足するものであるといふことは、ソクラテスの想ひ及ばなかつた所であつた。[4] 近代人にとつては、自然法則こそは、最も普遍內容性に富むものたるのであるが、ソクラテスが、認識及び概念の普遍內容性の最も意義ある表現を、道德の規範に見出したことは、道德の價値の普遍妥當性の根據を、その價値內容の普遍性に求めむとする傾向を示すものとして、興味深く考へられるのである。

三

正しき道德的生活に對する欲求が、事物の眞相を捉へむとする學問的思惟を喚び起すと共に、

3) Windelband, Lehrbuch der Geschichte der Philosophie, 9. u. 10. A. 1921, S. S. 77-78. cf. Maier, Sokrates, 1913, S. 262. ff.
4) Hönigswald, a. a. O. S. 136.

後者によつてのみ前者が可能とされるといふソクラテスの根本見解は、プラトーンにおいて、極めて高い調子に緊張せる形而上學的思想にまで發展せしめられた。プラトーンにとつても、哲學的思惟は、深く人間の本性に根ざした道德的欲求に促されて現れ來るのであつて、正しく生きむとする念慮が、實在の本質に追到せむとする哲學的思惟に原動力をさづけるのである。しかも正しき思惟は、事物の絶えざる流轉のすがたを追ふに專らなる知覺の如く、はかなく便りなき臆見を獲得するといふのであつてはならず、永劫不變なる事物の本質を示すところの其れ自ら確固不動たる認識を提供しなければならぬ。官能的知覺に映つては消え行く世界は、不完全且つ不十分なる意味においてのみ、實在するものといふべく、哲學的思惟を通じて顯現する世界、すなはちイデアの世界のみが、完全なる、十分なる實在性を具有するのである。眞に充實せる實在性をもつイデアと、わづかに稀薄不純なる實在性をもつにすぎない現象的事物とを比べて見ると、後者は各自それに固有なる特殊的個別的內容を以てみたされてゐるに反して、前者は、或る種類に屬する一切の個物に共通なる普遍的內容を含有するものであり、[1] 後者がそれぞれ特有なる形態において、官能の前を過ぎ去つて行くに反して、前者は永久に靜止せる純粹なる形態をよそほひつつ、思惟にとりてどこしへの憧憬の境地を形づくるのである。

かやうに、プラトーンにおいては、知覺の對象たる個物が特殊的論理的內容を有するに反して

1) cf. Bénard, Platon sa philosophie, 1892, p. 119 et suiv.

思惟の對象たるイデアは普遍的論理的內容を有することを以てその本質とし、あだかもその故にイデアは、眞實の意味において實在するものと言ひえられるのである。[2] 認識の普遍妥當性も、それが普遍的內容において永久的存立を保つイデアに關係することによつて、可能とされるのであり、官能的事物が不完全ながらも或る程度の實在性を有するのも、その特殊的內容が、イデアの普遍的內容に對し論理的倚存關係に立つことに因るのである。かのロツツエをして、プラトーンのイデアは、客觀的妥當性の思想的結晶たるに止まり、何等かの意味における實在性を含むのではない[3]といふ解釋を試みるに至らしめた迄にも、プラトーンのイデアにおいては、實在の論理的普遍的內容と、價値の普遍妥當性とが、有機的統一のうちに融合してゐるのである。そしてまた、斯かる有機的統一からして、價値の普遍妥當性と價値內容の普遍性との間に、必然的關聯が生まれて來る。

すべてのイデアの中で最高の地位に立つものは、善のイデアであり、あだかも太陽の光りが、一切の物體の形象をして可見的たらしめるやうに、善のイデアは、他の一切のイデアをして、道德的究極目的の光明に浴せしめることにより、各自の正しき意味を顯現せしめる。但し他の一切のイデアは、善のイデアに對し、目的論的倚存關係に立つのであつて、論理的類屬關係に立つものではない。むしろ價値の普遍妥當性と、その內容の普遍性との關聯の思想は、次の二つの方面

2) cf Wilamowitz, Platon, 2. A. 1920. S. 346ff.
3) Lotze, Logik, herausgeg. von Georg Misch, 1912, S. 513 ff.

において觀取される。――人間において、靈魂は肉體の牢獄につながれてゐる。この束縛から靈魂を解放して超越的實在の世界に翔りのぼらしめやうとする努力こそは、善なるものに向けられる人間の活動である。そして斯かる活動の最も意義あるものは、かの永久なるイデアの世界を直觀せんとする心のはたらきである。この意味に於いて、道德的價値は、その成立の形態の中に論理的普遍的內容を包容することにより、普遍妥當性を取得するものと考へられる。[4]――この純粹なる直觀的活動の方面の外に、人間が理性と勇氣と欲望とにみちびかれつゝ、現象的實在の世界を地盤として、合理的なる道德生活をいとなむ方面がある。しかも此方面において、眞實なる道德は、單なる個人の努力と幸福とにおいて成立するものではなく、個人に對して普遍的なるものとして現れる所の國家の完整的形成においてのみ成立するのである。この點に、プラトーンの特有なる國家觀が展開される契機はあたへられるのであるが、その中で、國家の構造が、全く個人の精神的、肉體的組織との類推において、想定されてゐるのを見ても、プラトーンが、國家を以て個人に對し類概念の地位に立つものとして思惟しやうとしてゐることが、觀取されるのである。[4]かくして、國家生活の諸相を地盤としつゝ、個人の活動を組成分子とするところの、さまざまの道德的價値が、眞正なる客觀的妥當性を有するものとして成立すると考へられる。茲に、價値內容の普遍性と、價値の普遍妥當性との第二の關聯が存在する。但し個人と國家とは、個物とその

4) cf. Natorp, Platos Ideenlehre, 1902, SS. 190-191.
4) cf. Natorp, Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik, 1, 1907, S. 25

イデアとの關係におけるやうに、十分なる意味において、特殊と普遍との論理的關係に立つものではなく、むしろ右に指摘した所の、善のイデアとその他のイデアとの間に見られるやうな、目的論的統一關係が、その間に認識されるのである。[5] この點から見ると、國家論などの方面における——又は思想の圓熟せる時代における——プラトーンにおいては、普遍的價値內容は、特殊的個別的內容に共通なるものとしての普遍的內容たることから進んで、特殊的內容を目的論的全體にまで結合するところの普遍的者、又は特殊的內容を產出し成立せしめる力としての具體的普遍的者たらむとする方向をたどりつゝあるものと言ひえられるであらう。

四

實念論(der Realismus)と唯名論(der Nominalismus)との論爭に連關しつゝ、中世の哲學において、前に擧示したやうな思索的傾向が、いかなる發展をなしたかといふことは、それ自身興味ある問題ではあらうけれど、思想史的關聯をさぐるのが、この稿の目的ではないから、さうした考察は之を省略して、右の傾向が、カントにおいては、如何なる形態をとつて現れたかといふことを吟味した後、一轉して、價値の類型と個性との問題の考察に移りたいと思ふ。

プラトーンの二元的世界觀の構成を促した根本的動機が、カントの世界觀においては、彼の批判的觀念論の思想によつて制約されつゝ、三樣の方向においてはたらき、隨つて三樣の意味にお

5) cf. Stahl, Geschichte der Rechtsphilosophie, 1856, S. 14ff.

ける世界一元論を成立させた。

ソクラテスからプラトーンへと傳へられた理想主義的根本要求が、後者に於けるイデアの世界と生成の世界との對立を生み出したのであるが、プラトーンが、客觀的價値としてのイデアと、イデアの典型を仰ぎ視つゝ生成するものとしての個物とを對立せしめた動機は、カントにおいては、理性の活動の先驗的形式としての價値と、この形式のはたらきを受ける素材としての實在とを對立せしめることによつて滿足された。次に、プラトーンが、永久不變の形態において存立する眞正の實在としてのイデアと、不斷の流轉に服する不完全なる實在としての生成者とを對立せしめた動機は、カントにあつては、意識を超越して存立する物自體と、意識に內在して意識の法則に從ふ現象との對立によつて滿足された。更に、プラトーンが、イデアの內容の普遍性と、官能的事物の內容の特殊性とを對立せしめた動機は、カントにおいては、一方には、右に擧げた理性の活動の樣式としての價値の普遍性と、その素材としての實在の特殊性との對立によつて滿足され、他方には、合理的實在としての自然の世界の普遍性と、非合理的實在としての直觀の世界の特殊性との對立によつて滿足された。

カントをして斯くの如き根本的轉回を企てるに至らしめたものは、彼が初めて十分なる意味において確立したところの批判的觀念論の思想に他ならぬのであつて、『われ〳〵の理性が活動する

諸方面において、その對象として個人的意識の前に現れ來るものは、本來われわれの理性の先驗的形式の所産に他ならぬ』といふ信念にみちびかれつゝ、彼は特有なる二元的世界觀を建設したのであつた。かくして、價値と實在とが對立せしめられ、物自體と現象とが對立せしめられ、自然の世界と直觀の世界とが對立せしめられたのであつた。

道德的生活の基礎を確立せむとする欲求が、カントの哲學的思索を絶えず支配したことは、ソクラテスやプラトーンやにおけると同樣であるが、後者の如く、合理的思惟の能力に、絶大の信賴を初めから託することは、カントの到底肯んじ得ざる所であつて、思惟の先天的能力の批判は彼のあらゆる哲學的思索の第一課題とされねばならなかつた。そして斯かる批判の結果は、認識の普遍妥當性の根據が、超越的實在の裡に求められないで、理論的理性の活動形式に具有する先天的妥當性に求められることゝなつた。茲において、價値と實在とは、決定的に相互的獨立性を取得するに至り、殊に両者の對立樣式は、單に理論的價値と實在との關係についてのみではなく、すべての價値と實在との關係にも推し及ぼされた。この點について、カントが、通常の解釋における如く、超越的實在としての物自體の規定を斷念しなかつたことは、プラトーン風の實在二元論に對する執着を示すものともいふべく、茲において、ロッツェがプラトーンのイデアの概念に對して彼獨特の解釋を加へたと同じやうな動機から、コーエンなどの試みたやうなカントの物自體の

概念の批判主義的解釋が誘發されるわけである。

理性の能力に對する冷靜嚴格なる批判は、プラトーンと比較された場合におけるカントの著しい特色を成すものと言ひえられるであらうが、前者の思索を一貫する熱烈なる理想主義的精神が、ひとしく後者の思索を支へてゐることも明かである。そして両者において、合理主義的傾向が、恒に力强く支配してゐることは、やがて、私が茲で問題としてゐる事柄についても、両者の見解の間に、共通點を生ぜしめるのである。

前述の如く、プラトーンにおいて、イデアは、一方には、眞理の價値の根源であると共に、他方には、道德の價値をはじめ、他の一切の價値の根源となつてゐる。そして、イデアが、價値の普遍妥當性の根源たることは、必然に、價値の內容をして、イデアの內容に平行して、普遍的構造を具有せしめるのである。プラトーンにおいてイデアが勤める斯樣な役割を、カントにおいて負擔してゐるものは、思惟の先天的形式であるが、それに基いて成立する所の認識の普遍妥當性及び必然性は、一切の可能的直觀內容に對して普遍的に適用され能ふといふ、思惟の先天的形式の本質と、不可分離的關係に立つものである。

認識の價値の普遍妥當性と、認識の內容の普遍性の必然的關聯の思想は、プラトーンにおいては、生成の世界を超越せるイデアの世界の存立の思想と照應するのであるが、カントにおいては、

普遍的内容の支持者としての實在の世界は、超越的意義において思惟されず、さながらプラトーンの意義におけるイデアと生成者との完全なる抱擁を意味するかのやうな、普遍的、經驗的實在としての自然の世界として思惟されてゐる。そして、自然の世界の認識の普遍妥當性は、この認識を可能ならしめる理性の形式の普遍妥當性から由來するものとして、その根據を確證されるのであるが、斯かる價値の客觀的妥當性の倚存關係からして、何故に認識は一般に普遍的内容の把捉たらねばならぬかといふことは、カントによつて十分に論證されてゐないやうに思はれる。

五

價値の妥當の普遍性は、價値の内容の普遍性に倚存するといふ思想、又は両者は互ひに極めて密接なる關係を有するといふ思想を、價値の理論における合理論的又は唯理論的傾向と呼ぶことゝするならば、かやうな合理論的價値觀は、カントの實踐哲學的思想において、最も純粹な形態をとりつゝあらはれてゐると言ふことが能きる。

價値に關するカントの思索は、道德的價値の問題の上に集中されたとも言ひ得べく、宜にジムメルが述べてゐるやうに、『カントは、認識論者として語らない場合には、その全思考方法からみて道德論者である、すなはち彼は本來道德的形式においてのみ價値を認識する』[1]のである。

カント自身の言を借りると、『この世界においては何處にも、否廣く此の世界の外においても、

1) Simmel, Kant, 5. A., 1921, S. 119.

唯善意志の外には、無限局に善と見做され得る樣なものは考へ得られない。……それは寶玉の如くその全價値を自己の裏に藏するものとして、眞に獨り自ら灼爍の光を放つであらう[2]』。しかるに、善意志の善なる所以は、それが遂行し若しくは成就する結果に因るのではなく、單に意欲に基くのである。而して人間の行爲の全價値を品隲するに際して、常に首座を占め、自餘一切のもの、條件と成つてゐる所の善意志の概念は、義務の概念の媒介によつて、十分に明瞭に認識される。義務は法則に對する畏敬よりする行爲の必然性であり、人が何等の傾向にも基かず、單に義務からして爲す行爲こそは、眞正の道德的價値を有する。言ひかへると、法則の表象その者の外には、道德的と名づけ得られる所の卓越せる善を構成し能ふものはない。而して謂ふ所の法則は如何なる法則であるかといふと、何等かの法則の遵守からして意志に生起し得べき一切の行動を意志から取除いた後には、行爲一般の普遍的合法性より外には、何物も殘らぬのであつて、この合法性のみが、意志の原理として役立つべきものたるのである。すなはち其れは、『余は余の格率が亦普遍的法則となるべきことを意欲し得る樣により外には決して行動すべからず』といふ要求を即ち意志の自律性の要求を立てるのである。しかるに、自律、即ち自分自身に對して法則であるといふ意志の特性は、正に意志の自由を意味するものであり、あらゆる理性者は、この自由の理念の下にのみ行動することを以て、その本領とする[3]。

2) Kant, Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, herausgeg. von Vorländer SS. 10-11. 安倍藤原氏共譯「カント道德哲學原論」13-15頁.

3) Kant, a. a. O. SS. 14, 17-19, 20, 77-邦譯. 20, 27-29, 31, 131.

その存在それ自身が絶對的價値を有するもの、目的それ自身として、或る定まつた法則の根據となり得るやうな或る物が、假りにあるとすれば、その中にこそ、そして唯その中にのみ、實踐的法則の根據は存在すべきわけであるが、人間、及び一般にすべての理性者は、目的其者として存在する。だから、各人は、自己の人格における、並びにあらゆる他人の人格における人間性を常に同時に目的として使用し、決して單に手段として使用せぬやうに、行爲しなければならぬ。そして、假令自ら立てた法則に、自身も同時に服從せしめられるといふ條件はあつても、人間性がこの普遍的立法者たるの可能性を有する處に、實に人間性の尊嚴は存立するのである。[4]

右に試みたやうなカントの道德說の要約からして知られるやうに、客觀的價値の無制約的普遍妥當性が、善なる意志の本質の考察を媒介として、最も鮮かに照明されてゐる。意志は、如何なる傾向によつても動かされず、如何なる結果の豫見にも基くことなく、純粹に義務からして發動する場合にのみ、能く善たり得るのであつて、他面からいへば、價値が價値として妥當する所以は、いかなる經驗的現實的根據によるのでもなく、謂はゞ己れみづからの裡に、その根據を藏してゐるのである。そして、自己の行爲の格率が、亦他のすべての人の行爲の格率たり得るやうにのみ行動せよといふ要求を立てることにおいて、意志の原理は成立するのであつて、價値が眞に價値たる所以は、あらゆる理性者によつて、その價値としての存立を承認され得べき性狀を有

4) Kant, a. a. O. SS. 52.-54, 66-67邦譯, 85-88, 110-111.

することに基くのである。

善なる意志が、宛かも寶玉の如くに、それみづからの裡にうつくしき光輝をたゝへるのは、必竟それが實踐的法則と直接に牢く結合してゐるからである。すなはち意志が、普遍的原理の高貴性に參加するか否かといふ點を標準としてのみ、一切の行爲の道德的價値は評定されるのであり從つて道德的價値は、普遍的內容を構成することによつて初めて、普遍妥當性を獲得するものとされるのである。[5]『汝の行爲の格率が、汝の意志によつて、普遍的自然法則となる可きかのやうに行爲せよ』といふ斷言命法は、その間の關係を表明するものである。

更に道德の實質的原理の方面においても、價値の妥當の普遍性と、價値の內容の普遍性との必然的關係の思想が觀取される。意志が合法則的たり得るための唯一の索緣としてあたへられてゐる實質的原理は、目的自體として存在するところの各人の人格における人間性であるが、カントの謂はゆる人間性が、各個の個人に對する關係は、プラトーンにおける國家と個人との關係よりも遙かに嚴密なる意味において、普遍對個別の關係を示すものである。だから目的の王國の構想は、到底個別的なる者の有機的統一としての普遍性を十分に表現するものではなく、あだかも自然法則が、無差別的必然性を以て、物體を一律に支配するところに、因果の世界が成り立つやうに、理性者が、假令自律的にであるとしても、一樣に普遍的內容を有する人格尊重の法則に服從

5) cf. Lask, Fichtes Idealismus und die Geschichte, 1914, S. 8ff.

することによつて、合理的なる自由の世界が形成されるのである。

六

カントにおいて、價値の世界と實在の世界と、自由の世界と必然の世界とは、互ひに極めて峻刻に對立せしめられてゐながら、他方には、これらの二個の世界が、相互に酷似せる論理的構造を有するものとして想定されてゐるために、道德的價値の普遍妥當性が、その內容的普遍性と、密接に連結してゐることは、右に述べた如くであるが、更に、それに類似した事柄は、カントによる實在の世界の構想についても觸目する所である。

認識の根源の問題について、唯理論の主張と、經驗論の主張との間に、批判的調和點を見出したことが、認識論上におけるカントの顯著なる功績たることは、言ふまでもないが、カントは、これらの二個の思想傾向に對し、全然不偏不黨の態度を持しつゝその調停を企てたといふよりは經驗論者の權利を十分に承認しながらも、しかも自己の本來の思想的出發點たる唯理論の傾向によつて、比較的により多く支配されたといふのが、一層適切であらうと思はれる。この事は、認識の價値の問題について、普遍的合理的認識の偏重の態度、言ひかへると、自然科學的認識の偏重の態度となつて現れて居る。けだしカントは、認識の普遍妥當性の根據を、超越的實在と認識內容との對應性に求めむとする從來の哲學の態度を一擲し、之を先驗的自我の綜合機能の先天

性に求めることによつて、批判的方法を確立したとはいふものゝ、謂ふ所の綜合機能の論理的價値は、ひとへに普遍的概念の構成において成立するものと考へた爲めに、普遍妥當的認識は直ちに普遍內容的認識を意味するといふ結果を生ぜしめた――より精密にいふならば、一方には、認識價値の普遍妥當性とその內容的普遍性との合體を生ぜしめ、他方には、經驗的科學一般の對象と自然科學の對象との合體を生ぜしめた。

けれども、この二樣の意味における合體は、批判的方法の正しき適用に基く結果と視ることは能きず、むしろカントが、彼みづからの主知的唯理論的精神にわづらはされた短所を露はすものといふべきであらう。而して、これに對する批判的方法の正しく徹底的なる適用は、一方には、價値の妥當の普遍性と、價値の內容の普遍性との批判的峻別により、他方には、經驗科學的概念一般の構造と、自然科學的概念の構造との批判的峻別によつて、初めて企及し得られるものであり、且つこれらの兩樣の批判的區別は、互ひに平行しつゝ、行はれるべきものと言はねばならぬ。私の考察したいと思ふ價値の類型と個性との問題は、前の方面における批判的方法の徹底に關聯して生ずるものなのであるが、しかも後の方面における其れを顧慮することが必要であるといふことは、右に述べた所によつて、おのづと暗示されてゐると思ふ。